

学 位 請 求 論 文 要 旨

中上健次文学における「路地」
—語誌的研究から抑圧の構造論へ—

平成 30 年 1 月

城西国際大学大学院 人文科学研究科
比較文化専攻

劉 国勇

本論文「中上健次文学における『路地』——語誌的研究から抑圧の構造論へ」は、中上健次の小説テキストを語る上で欠くことが出来ないキーワード「路地」を分析対象とし、「路地」という言葉について、中上健次文学テキストにより初出から定着までの来歴とその発展変化を検討し、また日本の歴史の総体を捉える時空を加えて検証し、これまで雑駁な「路地」論について整理・考察することで、「路地」作品を分析しながら、他の昭和作家の作品や被差別部落の作品との比較を加えて、中上健次文学における「路地」の抑圧構造を解明することである。

「路地」という言葉は、中上健次文学に於ける重要なトポスを示し、多くの批評者にも使用されているにもかかわらず、「路地」の語誌、つまり「路地」の起源や意味・用法などについて十分に明らかにされているとは言えない。「路地」の成立と変遷に伴う中上健次の思想変化について考察を進めていくことは、古代以来の長い天皇のことの葉の記憶の総体に対する「物語の物語」的な挑戦の視点や、いわゆる近代化以降、高度経済成長期以降も、爪痕がそのまま残った「大逆事件」から浮かび上がる帝国主義を脱構築する視点等、複線的に検討していくことが必要であると思われる。そのため六章構成を採ることによって、「路地」の前史及び「路地」誕生と発展と変化、「路地」の歴史性及び現代性、俳句からみた「路地」（中上と俳人の影響関係）を組み合わせることで独自の考察を行った。

まず、第一章「中上健次初期文学における『路地』前史」では、「路地」という単語は、中上健次の生まれ育った新宮の被差別部落を指示するものとして最初にテキストの中に登場した『蛇淫』（一九七五年）より以前の、数多くの現代詩、エッセイや短編小説を検討対象として、その初期のエクリチュールにおいて、すでに使われている「路地」という言葉の内包と、中上自身の出自に関し、或る程度言及されている被差別部落についての具体的なイメージ、さらには「路地」という言葉の原義を検討したものである。

初期の中上健次文学において、「路地」という語は、原義の「人家の間の狭い道路」しかとして使われていないが、すでに、暗闇、破壊などの「内向する暴力」の要素が含まれている。そして、被差別部落を指す「春日町」や「永山・長山」を用いて中上は一旦部落の出自を暴露したが、一九七五年～七七年前後、初期小説の単行本を契機にそれを削除し、出自を回避する。「春日」、「永山」、「長山」は「路地」の前史と言える。

第二章「部落を指す用語『路地』の誕生：「蛇淫」論」においては、中上の「蛇淫」と上田秋成の「蛇性の姪」を分析の視座に据え、被差別の歴史性を背負う「路地」を発見し、さらには、「路地」を発明していく中上文学の過程を詳しく追究した。

「蛇性の姪」からタイトルをつけた中上の初期短編「蛇淫」は、「路地」にはじめて「被差別部落」の意味を入れた小説である。中上の「蛇＝異類＝被差別部落民」論を発見したことにより、「蛇」の「淫」に顕れている「アジア的法・制度＝物語」の不可触性、「蛇」の「姪」という現代の同一性、つまり天皇を頂点とする階層秩序から離脱することに成功した。『蛇

淫』を書く時期の中上健次が、自分の書くべきテーマとその書き方についての明瞭な自覚に到達していたことを示していると思われる。

さらには、和歌山県新宮市新宮駅の裏の部落、春日地区を、「駅裏」→「駅裏の何々」→「駅裏の何々の路地」→「駅裏の路地」→「路地」、という「路地」を発明していくプロセスを導き出した。

第三章「中上健次『不死』論——〈被慈利〉・〈観音〉・〈性〉」においては、『不死』を〈被慈利〉、〈観音〉、〈性的なもの〉という三つのキーワードに焦点を当てて分析してきた。〈被慈利〉は、歴史喚起の発動装置として、高德の僧の聖ではなく、賤視を受け、様々な差別に直面していた下層の〈ひじり〉を語り、その人たちの現実の抑圧により、救済への渴望と加害の行為を繰り返す。さらに、〈被慈利〉は聖と俗の中間項として、〈性的なもの〉を通じて権力を脱構築する。そして、〈観音〉という言葉は、補陀落渡海という隠蔽された部分を喚起し、裏に生への渴望を引き出しながらも、無意味な死を再確認し、廃仏毀釈から神風特別攻撃隊まで、〈死んでもよい〉という観念を作り出した天皇制の〈正史〉に疑問を出す。さらに、〈性的なもの〉というのは、現代社会の政治や経済に再編成され、封建制と現代性の二重重荷を背負った「路地」の人の、反抗する捌け口となる。それは、理論として、〈性的なもの〉を未来的な視点から見据えている。

中上は、『不死』において、歴史、現在、未来の三つの視点から、隠蔽したことを暴露させ、不合理な根深い文化としての天皇制を破壊しようと考えている。これは、「路地」に生まれ育った人の、古代以来の長い天皇のことの葉の記憶との総体に対する「物語の物語」的な挑戦でもある。

そして、第四章では、東日本大震災に伴い発生した福島第一原子力発電所事故により、多くの人々が避難生活を強いられ、福島県民への差別や排除も跡を絶たない背景に、『火祭り』における「路地」差別の現代性を考察する。原子力発電所を建設するという話は、中上健次の小説『火まつり』の中にも登場している。火は、光であると同時に、熱でありエネルギーでもある。エネルギーを生産し、また差別をも新たに創出した「原発」と、「火まつり」は繋がっている。記紀神話で、火の神迦具土神の激しい性格により、陰所（ホト）を焼かれた伊邪那美命の死を既に描いてしまったことを思い起こせば、もう一度同じ主題を反復する『火まつり』は、伊邪那美命に対する一種痛切な鎮魂である。火之迦具土神に由来している「別火」の習慣、「穢れや不浄などが火を通して感染する」という考え方、つまり「血＝火＝穢れ」という回路は、血や穢れに対する差別に他ならない。伊邪那岐命の神話における「死の穢れと血の穢れ」の差別は、「差別の起源」である。「火＝毒」、つまり巨大なエネルギーとしての「火」の破壊力そのものを語っている中上健次は、「血＝火＝穢れ」を脱構築する。

第五章では、『千年の愉楽』においての「大逆事件」の記憶を考察し、「路地」が定着してから、「帝国」を脱構築する道程を検討する。『千年の愉楽』は「いずれも淫蕩・美形・妙技

を極め、若死にする<中本の一統>の男らの行状を、生命の極点で<路地>そのものと化したオリュウノオバの遍在的記憶によって語る」ものである。オリュウノオバを「導入してはじめて」、「差別の問題」や、「大逆事件につながるような政治と歴史」などが浮上する。「新宮の内部」とくに「路地」には、「大逆事件の爪痕がそのまま残った」。「大逆事件」で、罪を被った二六名のうち、大石誠之助（医業）、成石平四郎（雑商）、成石平四郎（薬種売薬）、高木顕明（僧侶）、峰尾節堂（僧侶）、崎久保誓一（農業）の六名が熊野出身で、松本巖の言葉を借りれば、「徹底的にやられたのが熊野、特に新宮の者らであった」。六名のうち、大石と成石平四郎が死刑された。新宮のもつ意味合いは突出して大きい。社会主義者・幸徳秋水を首謀者とする大逆の企てをフレームアップしたのは、近代国家の内部規律引き締めのためのいわば<通過儀礼>であり、「大日本帝国」が一個の閉じた内部として確立されるために必要であった外部、すなわち内部から排除されるべき「日本人ならざる者」という「ネガティブな表象」を作り出すための企てであった。そのような帝国を脱構築するには、「帝国」の内部で、フーコーの言う「権力のメカニズム」の「性」を語ることにより、差別に関する「優位」関係を解消したり、「物語＝法・制度」を批判したりする。また、語りの重層化により、「物語」を物語る。そして、「革命」を輸出することにより、外部で「帝国」を脱構築する。

最後に、第六章「中上健次と俳句」は、「路地」の前史および「路地」発展変化に伴い、中上と俳人の影響関係を組み合わせにおいて、特色をもたせることを意図して書かれた論考である。中上健次の俳句観から「路地」の抑圧構造が窺えられる。

中上健次は俳句に多大な興味を示し、角川春樹をはじめとする現代俳句界のトップクラスの俳人たち、茨木和生、宇多喜代子、後藤綾子、夏石番矢らと親交し、俳句会で選句・評論していた。俳句に関する膨大な発言は、読売新聞をはじめ、朝日新聞、雑誌『俳句』、『大河』、または『俳句熊野大学』などに散在される。本章は、そういう史料を整理したものである。中上健次にとって、俳句は熊野そのものなのである。俳句への関心と思索は松根久雄氏に、呼び起こされ、吉本健吉や角川春樹らとの共行動によりさらに強化された。それに、俳句というものを成すことにより恰も小説の方法を鈍らせるとしたのではなく、句座にあって、中上自身の文学的基盤に火を放ち、そこに自らを追い込む姿勢を貫き通した。路地というものには抑圧がある。俳句にも抑圧がある。ゆえに、熊野の歴史や文化に興味を示す中上は、短編小説を、俳句のように書く。物語であれ、能であれ、俳句であれ、中上にとっては、熊野あるいは「路地」を理解、解剖、または描写する手段に過ぎない。俳句に強い関心と理解を示し、俳句の力を畏怖し、熊野の事歴と豊饒を抱え込む俳句を愛した中上健次は、晩年まで保ち続けて俳句への関心をもつ。長編小説と俳句との間の、極小と極大の関係がある。その極小関係は、定型と散文の関係で、極大の関係は、「路地」という求心力である。